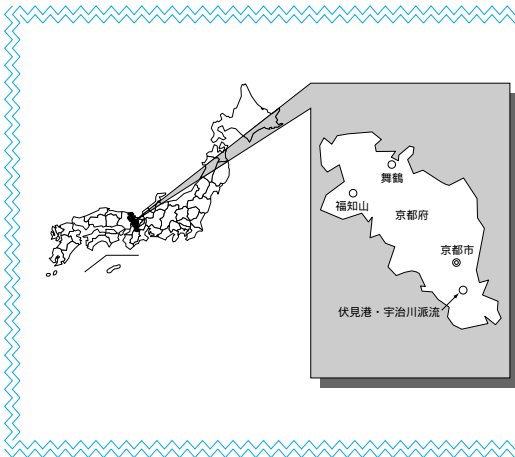


土木紀行

歴史的港湾「伏見港」 について

京都府京都市



伏見港の歴史

伏見港は、京都市南部の伏見区を流れる宇治川沿いに位置する面積約1 km²の地方港湾で、1594年に豊臣秀吉が伏見城を築造する際につくられた河川港であり、大坂（大阪）との水運の拠点となりました。その後、角倉了以の高瀬川開削（1614年）で高瀬舟が運航し、伏見と京都の結びつきが飛躍的に発展しました。17世紀末には幕府の援助で、商人の共同出資による伏見船（三十石船）が登場し、港はますます水運機能を高め、三十石船が盛んに入出入りするとともに、沿岸に多くの問屋が建ち並びました。江戸時代の最盛期には港湾都市伏見として、約4万人の人口を擁し、加賀百万石で知られる金沢の人口約3万人をしのぐほどであったといわれています。

幕末には有名な寺田屋騒動や坂本龍馬など歴史的な舞台となり、鳥羽伏見の戦いで伏見市街の南部地域は大きな被害を受けましたが、明治期に入

ると蒸気船の就航などで、再び活気を取り戻し、琵琶湖疎水ともつながり、蹴上のインクライン^(注)を経て、琵琶湖まで舟運が伸びることとなりました。

しかし、次第に鉄道など陸上交通機関にとって代われ、やがて水運の機能が衰えていくこととなります。

（注）インクライン：落差のある水路をつなぐ鉄道。

伏見港歴史的港湾環境整備事業

伏見港はこのように歴史的な舞台となるとともに、角倉了以の高瀬川開削、近代の琵琶湖疎水開削、淀川水系河川改修と深く関わるなど、わが国の政治・経済・土木技術上、極めて高い歴史的意義を有しています。また、現在でも、寺田屋をはじめ、伏見の酒蔵、港町の遊女の守り神を祀る長建寺、かつての舟運を偲ばせる三栖閘門など歴史的、景観的に貴重な資源が点在しています。

そのため京都府では、1988（昭和63）年に「伏見港・宇治川派流環境整備計画」を策定するとともに、伏見港歴史的港湾環境整備事業により整備を進め、伏見港開港400年に当たる1994（平成6）年に「伏見みなと公園」として完成し、現在に至っています。

整備内容

伏見みなと公園における港湾の「歴史的再生」とは、港湾施設のみを再現させるのではなく、背後地の「みなとまち」そのものや、みなとまちの

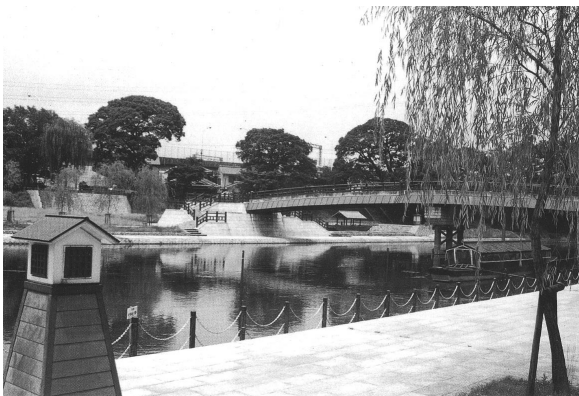


写真 1 伏見みなと公園

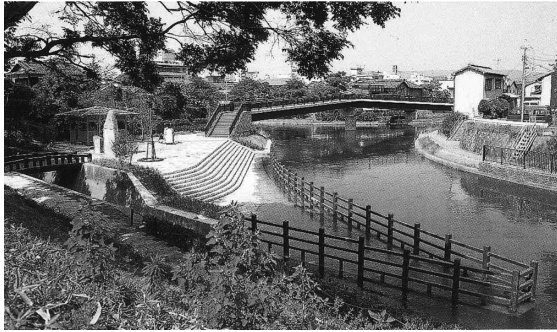


写真 2 出会いの水辺ゾーン

歴史とひろがり重視するゾーン。ポケットパーク、水上デッキ、角倉了以の石碑、休憩所等の施設。



写真 4 いこいの水辺ゾーン

身近な生活のやすらぎのゾーン。遊歩道、親水護岸等の施設。

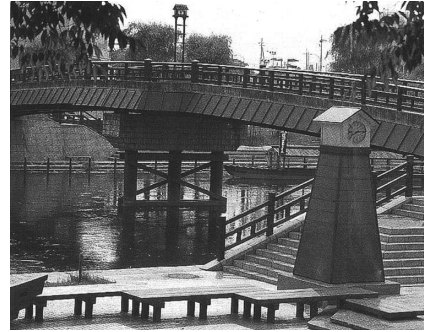


写真 3 伏見港再生ゾーン

みなとまち伏見の再生をイメージさせるゾーン。イベント広場、水上デッキ、物見櫓、船着場、三十石船等の施設。

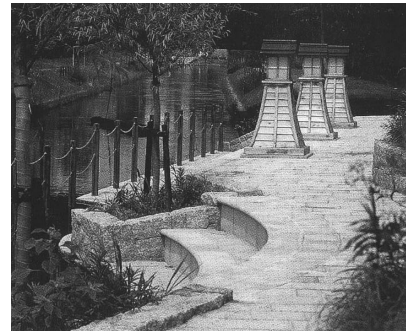


写真 5 伏見の浜ゾーン

伏見の代表的な景観を構成するゾーン。船着場、木橋、休憩所、シンボルゲート等の施設。

形成過程の中で、地域特有の産業・文化を育んできた港湾都市としての「雰囲気」そのものを再現することであり、地域の個性ある発展に寄与することを目的としています。

公園内には、わが国に数少ない河川港遺構を活かしながら、宇治川派流の水路沿い約3,000mを親水公園として整備しており、新しい伏見港の再生をイメージさせる「伏見港再生ゾーン」、歴史や空間の広がりを重視した「出会いの水辺ゾーン」、伏見の代表的な景観を形成する「伏見の浜ゾーン」、身近な生活のやすらぎの場となる「いこいの水辺ゾーン」といった四つのテーマに応じて、遊歩道、水上デッキ、橋梁、休憩所や船着場などの施設を整備しています。特に伝統的な木造船の造船技術を駆使して復元された江戸時代の舟運の象徴である三十石船は伏見みなと公園のシンボルとなっています。

新たな観光スポットとしての伏見港

2003(平成15)年には国土交通省により三栖閘門周辺部の修景整備の一環として、管理棟を資料館

とし伏見港の歴史や閘門の模型を通じて歴史的な舟運の仕組みを説明する施設として整備されました。

また、観光シーズンの土日を中心に宇治川派流じゅうごくぶねの中を十石船が地元観光協会さんじゅうごくぶねで運航されるなど、周辺の歴史的な資源も含め、京都市南部の新たな観光スポットとして多くの観光客で賑わっています。

皆様も京都観光に訪れる機会がございましたら、ぜひ「伏見みなとまち」の散策へおこしやす!



図 1 江戸時代の京橋付近(淀川兩岸一覽)